

Do you know about Uganda?

竹石 奈津子

横浜市立蒔田中学校

◆担当教科：英語科

◆実践教科：英語・課外活動（文化祭）

◆時間数：6時間

◆対象学年：中学1年生、中学3年生、夜間学級、文化祭実行委員1年生（各1時間）、英語科教員（2時間）

◆対象人数：224名（中学1年生：143名、中学3年生：34名、夜間学級：7名、文化祭実行委員1年生：5名、英語科教員：35名）

カリキュラム

<実践の目的>

開港150周年を迎える横浜では伝統的に海外との交流を持ち、多文化を町のシンボルとしてきた。しかしながら、「人々がともにいきることのできる公正な社会」が実現できているだろうか。肌の色や髪の色で、いじめや、からかいなどが、後をたたない現在の学校の状況を考え、「共に生きることの大切さ」を考えさせたい。

授業の構成

時限	テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
1	ウガンダってどんな国？ ○アフリカというと、飢餓や貧困などのイメージがあるが、私達の持っているイメージはどうか見直してみる。 ○自分が持っている思いこみに気づき、事実を見つめることの大切さを学ぶ。	(1) 海外旅行に行きたい国はどこですか？ということを英語でインタビューする。 アメリカやヨーロッパなどに偏ることに気づく。 (2) アフリカについて思い浮かぶ言葉を書き出し、発表する。 (3) アフリカの貧困に関するビデオを観る。 (4) 教師が撮ってきた写真を見て、話を聞く。 (5) 感想を聞く。	(1) 黒板 (2) ウガンダで収集した写真

授業の詳細

中学1年生、中学3年生、夜間学級、英語科教員に向けて授業を行った。授業対象の夜間学級とは、韓国人1名 中国人4名 日本人1名の構成である。

<1年生の反応>

授業時間の関係で、(1)の海外旅行で行きたいところはどこですか？という発問ができたクラスとできなかったクラスがある。多くがアメリカやカナダなど知っている国の名をあげた。やはり、北に偏っていた。

(2)「アフリカについて思い浮かぶ言葉を書きだしてごらん」という発問に対して生徒の答え。

○自然 ○動物 (アフリカ象 キリン ライオン) ○広い ○暑い ○エイズ 等がでた。

私は、最初、生徒たちは、アフリカに対して、貧困や暑さなどのマイナスイメージを持っているであろう、と想像していた。しかし、生徒たちの答として多かったのは、マイナスなイメージよりも、アフリカの自然や動物についての答えの方が多かった。

《アフリカの飢餓で苦しむ子どもや大人のスライドを流したときの反応》

多くの生徒は深刻に見ていたが、一部「○○(男の子の名) だあ」と冷やかしやからかい、笑いが起こったことが残念。

学校全体的にやや荒れているので、一部の生徒の反応に過剰に他の生徒も反応してしまう。心を耕す必要性を強く感じた。なさけない思いもしたが、これが現実なのだ。と受けとめて今後どうするかを考えたい。

<3年生の反応>

「アフリカについて思い浮かぶ言葉を書きだしてごらん」という発問に対して生徒の答え。

○エイズ ○貧困 ○飢え ○水不足

興味深かったのは、一年生と比較して、マイナス面の情報が多く出されたことである。

私(教師)の予想通りの答が出て来た。つまり、学年が進むうちに、大人が持っている固定観念が植え付けられているということも考えられる。出て来た言葉を英語で何ということかということを一語一語置き換えて学習してみた。

授業後に手紙を書いて交流してみませんか?との問いかけに複数の女子生徒がやりたい!と答えてくれた。手紙はまだ添削中だが、交流が生まれることを期待している。

<夜間学級の生徒の反応>

「アフリカについて思い浮かぶ言葉を書きだしてごらん」という発問に対して生徒の答え。

似たような答が多数であるが、数は子どもたちに比べて多くでた。プラスの情報とマイナスの情報半々といったところであろうか。

生徒の年齢が16才~75才という幅広い年齢と、多国籍のクラスであること、人数が少なく皆仲が良いということ。いろいろな条件があったため、中学生の反応とはかなり違って、わきあいあいとして、一生懸命取り組もうという姿が見られた。自分たちの知らない国に関して、非常に高い関心を示した。

<英語科教員の反応>

「アフリカについて思い浮かぶ言葉を書きだしてごらん」という発問に対しての答え。

やはりマイナスのイメージを持っている方が多かった。語彙が豊富で、たくさんの言葉が出てきた。

開発教育のこういったセミナーをもっと開いてほしい。継続的に続けてほしいなどのうれしい要望が出た。やはり、知らないから踏み込めない。踏み込めないから開発教育が普及されないのだ。と感じた。

成果と課題

アフリカに対する固定観念や知らないことを知ることの喜びを与えられたと思う。生徒にとってあらためて、自分たちの思い込みが事実を狂わせるのだということを知る良い機会になったと思う。私の経験を通じて、生徒たちの目が世界だけでなく、自分たちのことも考えるきっかけになったのではないだろうか。生徒の感想はそれぞれだが、もっと知りたい。思わせることができた。私たち

は情報を注入するのではなく、知りたいという心を揺り動かすことの方が大切なことから、成功といえる。

アフリカでの研修時、JICAスタッフ（同行者）と同じホテルの部屋だった。ラッキーなことに、彼女と今後開発教育を進めていくにはどうしたらよいかということ話し合うことができ、それが授業への大きなヒントになった。話し合った中で出てきたのは、自分たちができる一歩として、他の教職員の援助なしには、達成できないということである。学校では、スタンドプレーはあまり職員間で好まれない。しかも、総合の時間はこれからカットされる方向に決定されているし、道徳は年間計画があり、割り込むことにはかなりのエネルギーを必要とする。

こういった、悪条件の中で開発教育を進めていくには準備と熱意、そして情報をアウトプットしていく必要がある。

自分の伝えたいことが、多くなりすぎて、まとまらなかった。子どもの言葉をもっと拾うべきであった。

これからの課題であるが、やはりこれから独りよがりな授業にならないためにも、研鑽を積み重ねなければいけないことを痛感している。いずれ、すぐに私が経験した情報も古くなる。現状を把握し、開発教育を進めていくためには、授業を続けていくことが必要である。そのための、仲間づくり、人脈の開発を早急に行動に移して生きたい。今回知り合った先生方との交流を絶たないようにお互い情報交換をしていきたいと考えている。

資料 生徒に紹介した写真(一部抜粋)



「小学校を卒業するまで学校にいきましょう」という標語。目立つところに貼られていた。



英語は全ての教科に通じる。中学校の図書館に副校長先生が手書きで書いているものである。



家の庭にできたシロアリの塚からレンガをつくれます。



車いっぱいバナナを積んでいます。



カンパラ市内オリンピック前だったのでオリンピックの絵です。看板はスポンサーのコカコーラのもの 派手ですね。このようにアフリカにも発展した都市はありにぎやかです。



工事現場ですが、しゃべって休んでいます。この国は基本的に男の人はあまり働かない風習があります。男尊女卑の強い国です。



赤道が通っている。観光客向けの店も近くにあった。



土地は赤土が多く農耕にあまり適さない。



アフリカの女の子です。援助による服なのでしょうか。真ん中の女の子のおなかは栄養失調なのでしょうか、大きく膨れています。



携帯電話の会社が広告として壁をピンクにしています。ウガンダのあちこちに見られました。